

III 肥後における古墳の調査 2

1. 玉名市 伝左山古墳
2. 玉名郡岱明町 弁財天古墳
3. 熊本市 千金甲2号墳
4. 熊本市 二軒小屋古墳
5. 熊本市 天福寺裏山古墳群

例 言

- 本編は1981・1997年に熊本大学文学部考古学研究室がおこなった熊本県内における古墳の実測調査報告である。
- 調査期間および調査参加者は以下の通りである。
 - 伝左山古墳 [1981.9/1～9/3]
甲元眞之 西住欣一郎 本山 [宮本] 千絵 米倉 [河野] 法子
 - 弁財天古墳 [1981.9]
甲元眞之 西住欣一郎 本山 [宮本] 千絵 米倉 [河野] 法子
 - 天福寺裏山古墳群 [1997.3/3～3/12]
甲元眞之 藏富士寛 今村佳子 大坪志子 若杉竜太 尾上博一 美浦雄二
若杉あずさ 江島賢一 小路岳彦
 - 二軒小屋古墳 [1997.4/26～5/1,3,7～10,12,15,16,21,6/4～6]
藏富士寛 若杉竜太 尾上博一 西山由美子 濱田智美 藤木聡 藤江望 辻村美代子
藤本圭司
 - 千金甲2号墳 [1997.6/23,25,27,30,7/1～4,6,14～17,26]
若杉竜太 西山由美子 濱田智美 江島賢一 小路岳彦 古野京子
- 伝左山古墳に関しては熊本県教育委員会西住欣一郎氏、弁財天古墳に関しては埋蔵文化財サポートシステム本山千絵氏より、それぞれ玉稿をいただいた。
- 本編の全体的なとりまとめは藏富士がおこなったが、その内容に関しては執筆者各人の見解によるもので、本編全体にわたった統一はおこなっていない。
- 執筆は各古墳毎に担当者を配し、その氏名は文章末尾に記した。
- 写真図版の作成は、小路岳彦がおこなった。

本文目次

1. 伝左山古墳	1
2. 弁財天古墳	4
3. 千金甲2号墳	6
4. 二軒小屋古墳	11
5. 天福寺裏山古墳群	18

挿図目次

第1図 菊池川下流域における古墳分布図	第8図 二軒小屋古墳 石室実測図
第2図 伝左山古墳 石室実測図	第9図 白川下流域における屍床変遷概念図
第3図 弁財天古墳 石室・石棺実測図	第10図 金峰山東麓における古墳分布図
第4図 金峰山南麓における古墳分布図	第11図 天福寺裏山古墳群 周辺測量図
第5図 千金甲2号墳 石室実測図	第12図 天福寺裏山古墳群1号墳 石室実測図
第6図 千金甲古墳群 石室変遷図	第13図 天福寺裏山古墳群2号墳 石室実測図
第7図 二軒小屋古墳 墳丘測量図	第14図 天福寺裏山古墳群3号墳 石室実測図

図版目次

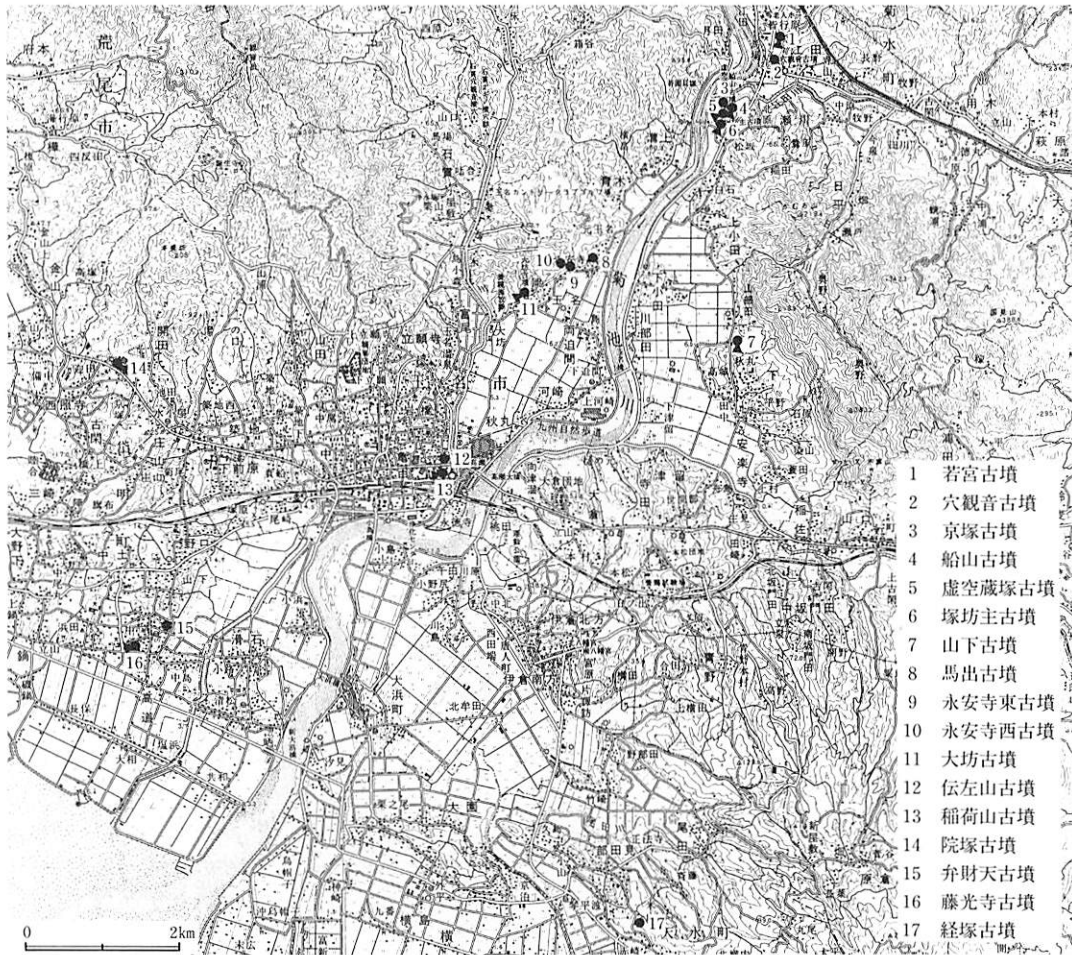
図版1 上 千金甲2号墳墳丘	図版6 上 天福寺裏山古墳群3号墳玄門部
中 千金甲2号墳羨道部	中 天福寺裏山古墳群3号墳玄室前壁
下 千金甲2号墳玄室奥壁	下 天福寺裏山古墳群3号墳玄室奥壁
図版2 上 千金甲2号墳玄室左側壁	図版7 上 天福寺裏山古墳群2号墳墳丘
中 千金甲2号墳玄室右側壁	中 天福寺裏山古墳群2号墳玄門部
下 千金甲2号墳玄室前壁	下 天福寺裏山古墳群2号墳玄室奥壁
図版3 上 二軒小屋古墳墳丘	図版8 上 天福寺裏山古墳群1号墳墳丘
中 二軒小屋古墳羨道部	中 天福寺裏山古墳群1号墳玄室前壁
下 二軒小屋古墳玄室奥壁	下 天福寺裏山古墳群1号墳玄室奥壁
図版4 上 二軒小屋古墳玄室天井部	図版9 上 伝左山古墳墳丘
中 二軒小屋古墳玄室右側壁	中 弁財天古墳近景
下 二軒小屋古墳玄室前壁	下 弁財天古墳石屋形
図版5 上 天福寺裏山古墳群遠景	
中 天福寺裏山古墳群近景	
下 天福寺裏山古墳群3号墳墳丘	

1. 伝左山古墳（玉名市繁根木字北）

伝左山古墳（第2図 図版9）は直径約35m・高さ約5mの円墳で、県北を流れる菊池川の下流域右岸の台地に位置する。同じ台地上の近接した箇所には稲荷山古墳（前方後円墳）がある。この2基の古墳の北東約2.5kmの地点の菊池川右岸には、大坊古墳（前方後円墳）・永安寺東古墳（円墳）・永安寺西古墳（円墳）等の一群が存在する。さらに、この一群の北東約3kmの菊池川左岸には船山古墳に代表される清原古墳群や江田穴観音古墳がある（第1図）。

伝左山古墳には横穴式石室以外に、同じ墳丘内に舟形石棺が埋設されている。発見当時、舟形石棺に伴う鉄製品の副葬品があったと報告されている。さらに、安政4年頃の石室発見当時を実見した塚本平八氏の話聞いた福原氏によると、石室北側の側壁に沿って石棚があり、その上面に、短甲等の副葬品をおいてあったとのことである⁽¹⁾。この石棚は現在では確認できないが、後室の玄門部が中央ではなく、南側に偏っているのは石棚の存在に関連すると考えられる。

石室は5世紀後半に築造されたと考えられ、九州における最古期の複室構造として挙げられる。また、先述した菊池川下流域の古墳群は複室構造の石室が集中して分布する地域の一つとして捉えられ、伝左山古墳から変遷していく複室構造の古墳が存在する⁽²⁾。



第1図 菊池川下流域における古墳分布図

玄室 伝左山古墳の玄室は縦長長方形の平面形を呈し、長さ約2.2m・幅約1.9m・高さ約2m、前室は横長長方形の平面形を呈し、長さ約0.9m・幅約1.1m・高さ約0.8mを測る。玄室の各壁の前面には一枚の板石（厚さ約5～15cm・高さ約40～70cm）が床面から立ち上がり、石障を構成している。石室の平面形がやや縦長の方形を呈するものは、県北・中央部の石障系石室の中でも古いグループに属する⁽³⁾。石室の壁は割石小口積みであり、玄室の石障より上部の各壁は、四隅の角を無くすことを強く意識した石を配し、断面形が穹窿形になるように持ち送りの石積みをおこない、天井部に至っては小楕円形（長径約1m・短径約0.8m）の平面形を呈している。この石積みの技法に規範構造となるものを忠実に再現しようとする意図がうかがわれる。

突起 また、この石室の特異な構造は、奥壁・左右壁の3箇所に突起をもつ点である⁽⁴⁾。突起は各壁より数十cm突出するように割石を組み込んだものであり、床面より約0.7m～1mの高さに位置している。左右壁の突起は各水平方向のほぼ中央にある。奥壁突起の水平方向に位置は、中央部よりやや北側にずれる。（西住欣一郎）

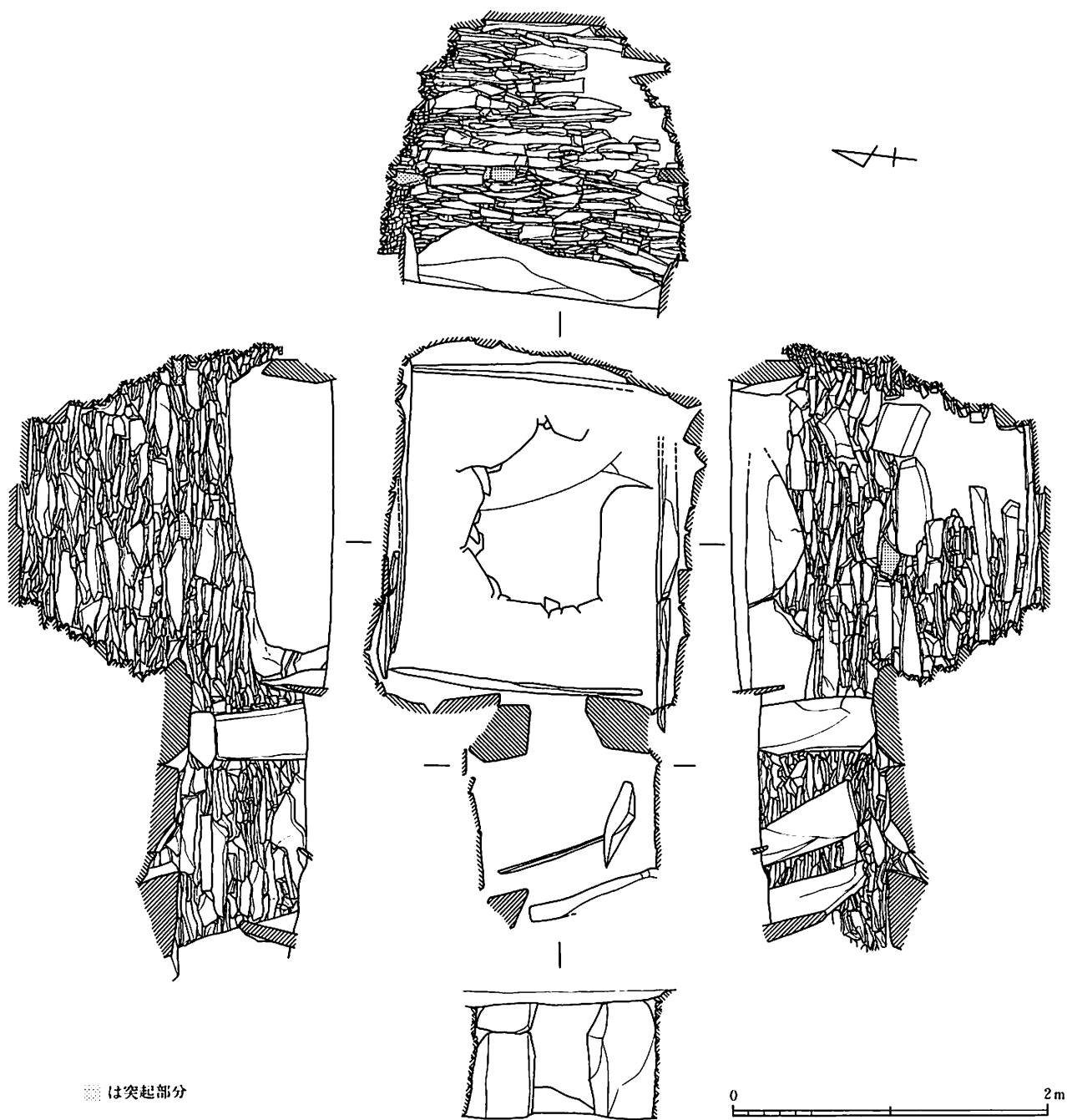
註（1）梅原末治ほか「玉名郡繁根木の古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊、1925年。

（2）松本健郎「複室墳の諸問題」『熊本史学』第37号、1970年。

（3）河野法子「石障系石室に関する一考察」『肥後考古』第2号、1982年。

（4）三島格「九州における突起ある横穴式石室墳」『熊本史学』第13号、1957年。

土生田純之「突起をもつ横穴式石室の系譜—本州における事例の検討—」『考古学雑誌』第66巻第3号、1980年。



第2図 伝左山古墳 石室実測図 (1/40)

2. 弁財天古墳（玉名郡岱明町高道字石橋）

弁財天古墳（第3図 図版9）は玉名平野の沿岸部、菊池川が有明海に注ぐ旧河口の右岸、小台地上に存在する直径約40mの円墳である⁽¹⁾（第1図）。古くから開口していたらしく、信仰の対象となっており、今日でも毎年12月15日は祭られている弁財天の例祭となっている。

石室 主体部は簡単な羨道を持つ単室構造の横穴式石室⁽²⁾で、ほぼ南に開口している。実測した時点では、羨道部・玄門部は確認できず、石室内には土砂が厚く堆積し、石室天井部や壁部は樹根による崩壊が進行していた。したがって、石室平面形や石室壁の下部構造は観察できなかった。実測図から、石室平面形は一辺2.2m程度の正方形を呈するものと推測される。また石室壁の下部は一枚ものらしく、上部は安山岩の割石を小口積に持ち送っており、天井は穹窿形であったと思われる。積石の小口面には、部分的に赤色顔料の痕跡が認められる。

石棺 石室の奥壁に沿って、平入りの横口式石棺が南向きに据えられている。棺蓋は盗掘孔があき、二分割され、埋葬時の現状を留めているとは思えない。流入土により、棺底部や東側小口部は部分的にしか観察できない。

棺蓋は阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜式で、菊池川流域で広範にみられる屋根形を呈し、小口面に各1個の円柱状縄掛突起を有している。縄掛突起を含めた棺蓋の長さは約1.94m、幅約0.75mである。平坦面を持つ棟は正面側（南寄り）に付いており、奥壁側長辺にある組み合わせ状の加工は、正面側長辺には施されていない。さらに、正面側には窓縁状の刳込みがあり、棟から軒先へのびる線は、隅角ではなく、長辺に降りてくる。

棺身は5枚の石材から成っている。奥壁側（北側）は3枚の安山岩の薄い板石を並べて側石としており、内面には赤色顔料が塗られている。小口部（東・西側）は厚みのある板石を据えて側石としている。前面部（南側）と棺底部は阿蘇溶結凝灰岩製で、一体となって刳抜かれており、前面部は小口側石よりかなり低く、開放部分となっている。棺蓋は主に小口側石によって支えられているようであり、あるいは奥側石は石室構造の一部である可能性も考えられる。

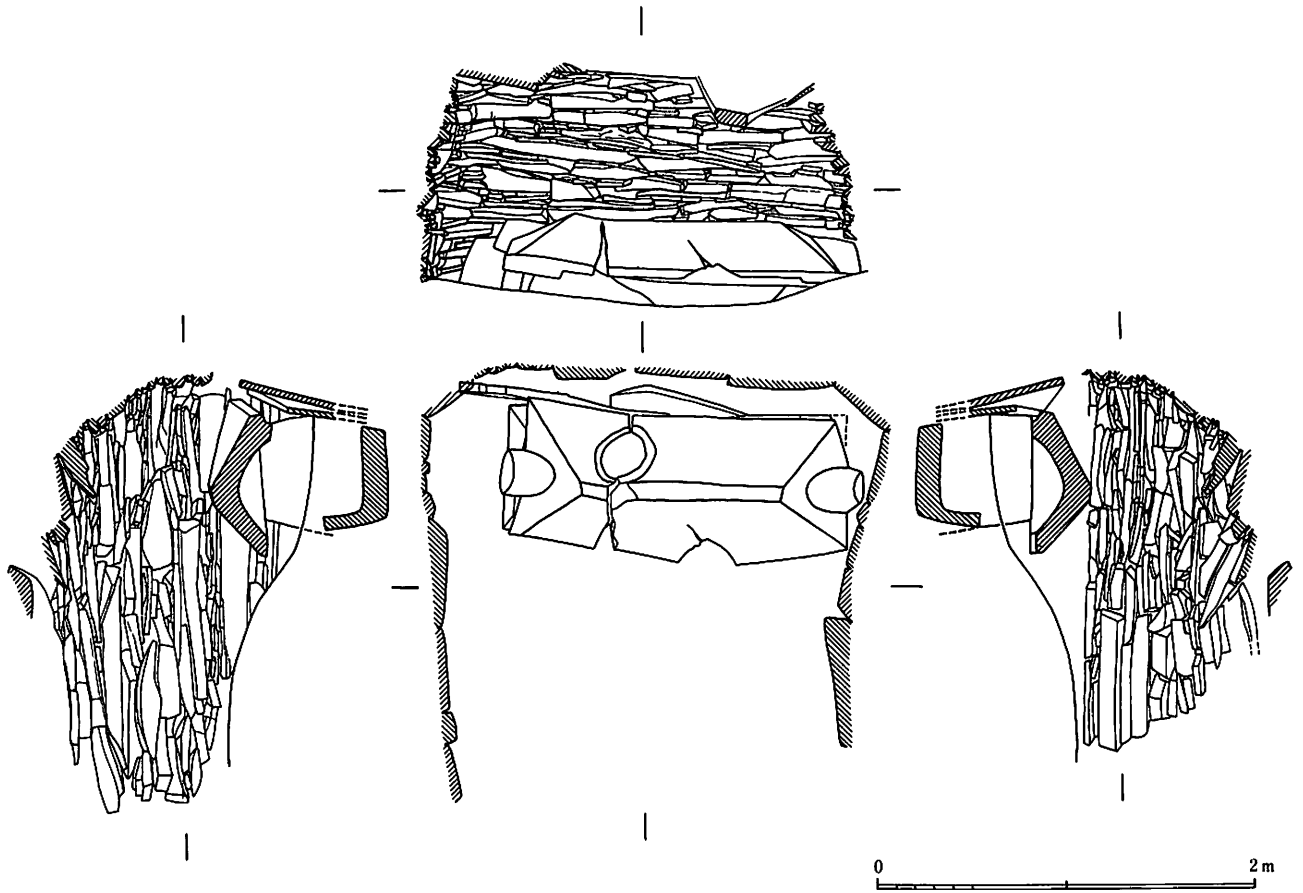
石屋形 この石棺の構造は、同じ菊池川流域の塚坊主古墳・チブサン古墳、また宇土半島基部の国越古墳の石棺との強い類似性が認められる。これらの類いの石棺は、あるいは石屋形の範疇に含まれるものであるか、未だ定説がない。しかし、これらが、石棺から石屋形への変化の過程で成立することは間違いない。ただし、弁財天古墳の石棺に限っていえば、九州の横口式石棺を埋葬する古墳の多くが前方後円墳であること、またその棺身構造は組合式であることを考えれば、その成立が問題とされるべきであろう。 （本山千絵）

註（1）田辺哲夫「弁財天古墳調査報告」『玉名社会科研究会報』、1952年。

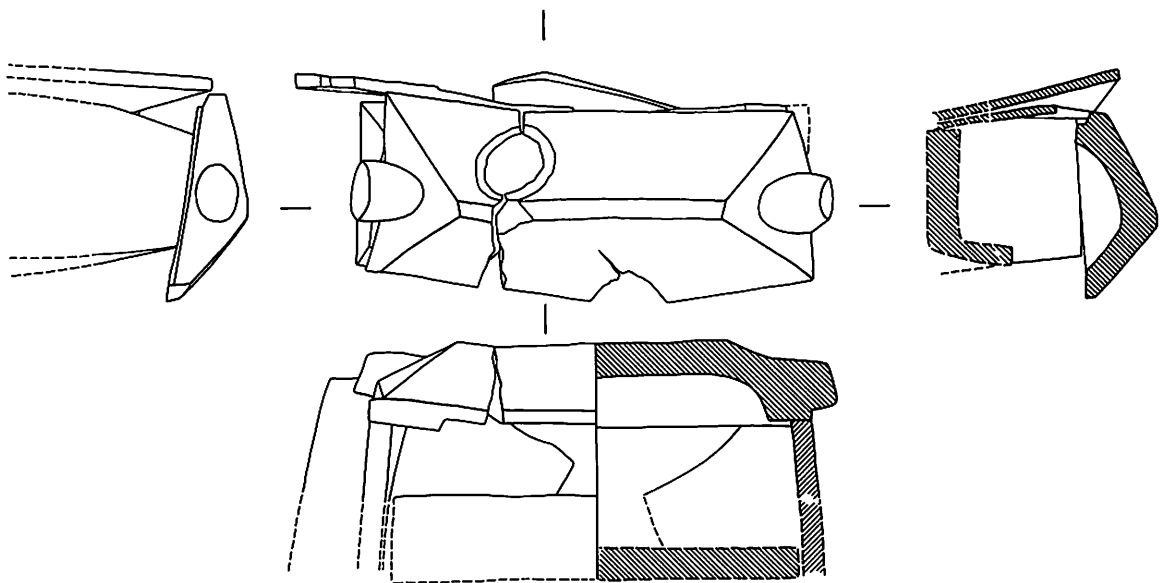
しかし、古くは前方後円墳と考えられており、その可能性は否定できない。

（2）原口長之「肥後―菊池川流域」『古代学研究』30、1962年。

坂本経堯「熊本県玉名郡弁財天古墳」『日本考古学年報』1、1948年。



弁財天古墳石室実測図 (1/40)



弁財天古墳石棺実測図 (1/30)

第3図 弁財天古墳 石室・石棺実測図

3. 千金甲2号墳 (熊本市小島下町字高城山)

立地

千金甲古墳群は、金峰山南側の権現山から高城山にかけての標高30～115mの斜面に連なる5基の円墳から成る(第4図)。高城山にはこの他高城山古墳群が存在するが、この古墳群は千金甲古墳群と混在しており、両古墳群は本来、一連の古墳群であったと考えられている⁽¹⁾。

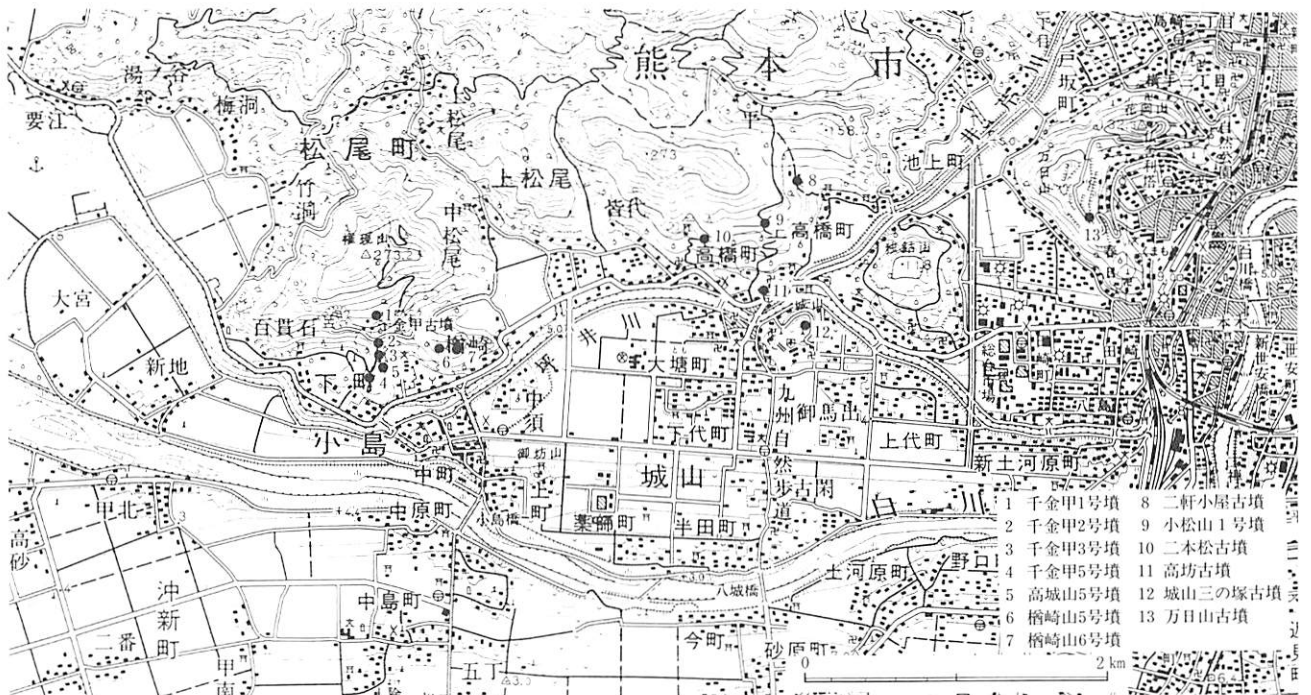
過去の調査

千金甲古墳群の調査は、大正年間における濱田耕作・梅原末治氏ら京都帝国大学文学部考古学研究室によるものを嚆矢とする。その結果、1号墳の石障に施された浮き彫りの同心円文や3号墳の石屋形の奥壁・側壁に彩色された円文や靱・舟・弓などの装飾が研究者の注目を浴びることになった。さらに2号墳では石室左側壁に赤色顔料か彫刻かと思われる線の一部があると記載されているが、現在は確認できない。なお、この調査の報告書は『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』として刊行されている⁽²⁾。

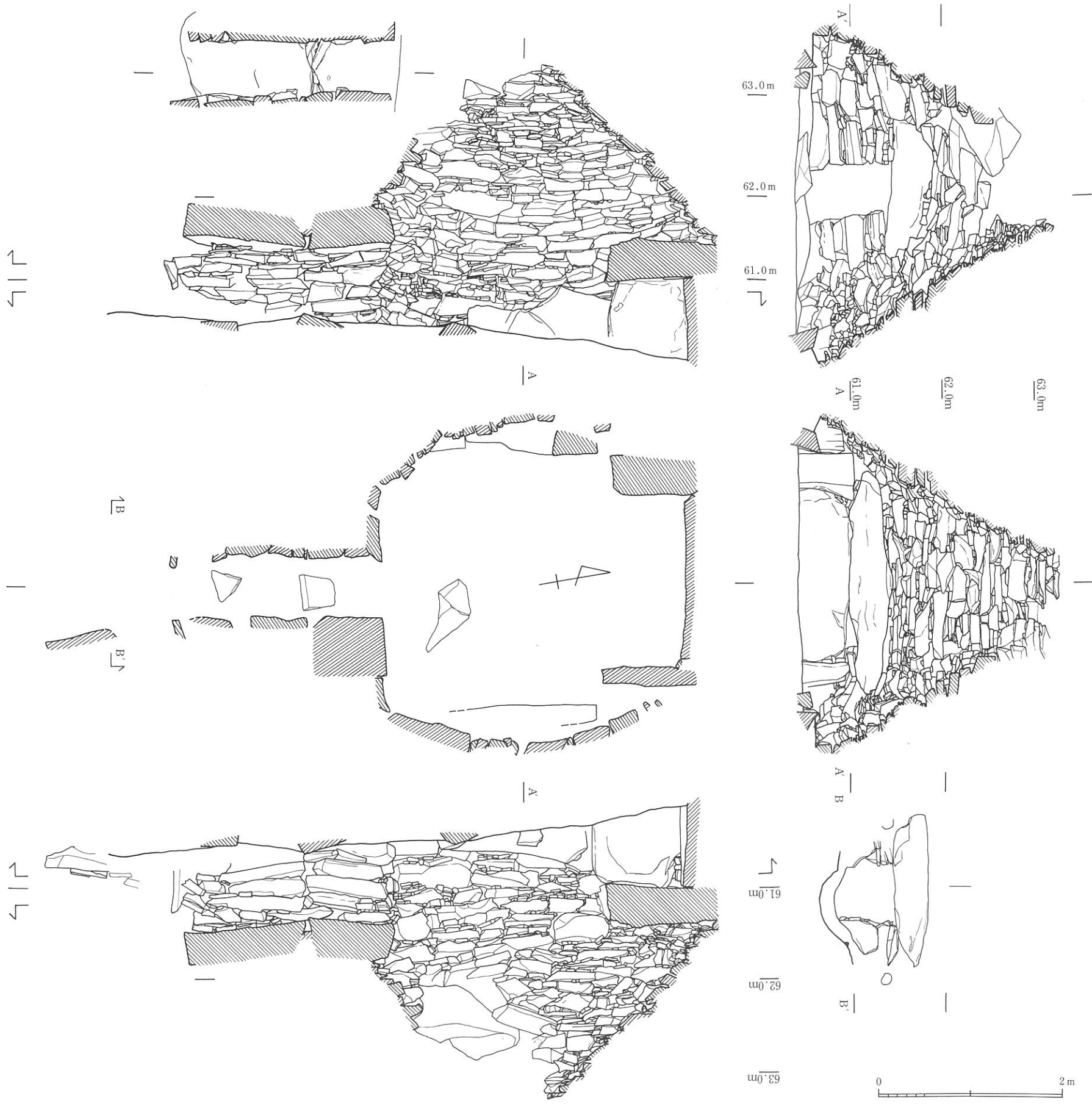
1960年代に入って、千金甲古墳群の調査が本格的におこなわれるようになった。千金甲1号墳石室の詳細な実測に続き、千金甲古墳群を含めた高城山・檜崎山各古墳群の全面的な調査、報告がなされた⁽³⁾。その後、1970年代前半、1980年代前半の2回にわたり、熊本県内の装飾古墳が調査され、その一環として千金甲3号墳石室の実測がおこなわれた。この調査の成果は、『熊本県装飾古墳総合調査報告書』として公にされている⁽⁴⁾。近年、熊本市史の編纂に伴ない、千金甲1号墳の墳丘測量がおこなわれた。その際、金峰山南麓の詳細な遺跡分布図が作成されたが、京都帝国大学の調査時に確認されていた4号墳の位置が明確にされなかった⁽¹⁾。今後は、4号墳の確認も含め、千金甲・高城山古墳群の全体像を確立していく必要がある。

古墳群の内容

これまでの調査より、千金甲古墳群の墳丘や石室構造については、ある程度明らかになっている。1号墳は権現山の南斜面に位置し、東西9m、南北12mの楕円形を呈した円墳である。主体部は単室の横穴式石室で、石障を有し、その内部にはコの字形の屍床を配する。羨道部は埋没しているが、調査所見によると推定長3.6mとの報告がされている⁽⁴⁾。3号墳は、権現山南斜面に位置する径15m前後の円墳である。主体部は単室の横穴式石室で、その奥壁に沿って石



第4図 金峰山南麓における古墳分布図



第5图 千金甲2号墳 石室実測図 (1/50)

屋形を設けている。狭長な羨道を有し、その壁体に腰石を配している。5号墳は墳丘盛土が流失しており、原形を留めていない。主体部は単室の横穴式石室である。玄室内には石屋形を配しているが、天井石を奥壁と右側壁に組み込ませた石棚状を呈するもので、左側に立柱状の袖石を有する特異な形態である。また、玄室・羨道部ともに腰石がみられる。

千金甲2号墳は、これまでの調査である程度実態が明らかになっていたが、詳細な石室実測図がないことが問題であった。そこで、石室構造の実態把握と白川下流域における横穴式石室の変遷を解明する上での重要性から、当研究室がその実測調査をおこなうことになった。

千金甲2号墳（第5図 図版1・2）は、権現山から高城山にかけての丘陵部に位置する径約11.5m、高さ約4.5mの円墳である。主体部は単室の横穴式石室で、主軸をS-10°-Wにとり、全長6.8mを測る。玄室天井部および右側壁上部が破壊されている。

千金甲2号墳

玄室は奥行3.3m、最大幅2.7mで、その平面プランは胴張りで、やや縦長である。床面には、破壊された天井部からの流れ込みによる大量の土砂が堆積している。壁体は安山岩の割石を積んで構築しているが、一部塊石も使用されている。腰石の使用はみられない。また、壁体の石積みはその最下部から、直線的に持ち送られている。両側壁に沿って、厚さ20cm前後の板状の大型石材が配置されている。この板石にはかなり丁寧な面取り調整が施されており、平滑な面に仕上げられている。

玄室

また、玄室奥壁に沿って石屋形が配置されており、その奥壁・両側壁はともに石室壁体から独立している。幅（内法）は1.85mで、高さは石屋形内に土砂が堆積しているため、不明である。石材は安山岩を使用している。石屋形の屋根石は自然石を用い、その両側壁と奥壁の前面・内面には面取り調整が施されている。玄門袖部は、割石を積んで構築されている。袖部の幅は0.6mで、羨道幅とほとんど差がなく、玄門部の突出はみられない。

石屋形

羨道部は、長さ3.5m、幅0.7mで、その側壁は比較的大きさの整った割石が使用されている。羨道部の先にも、板石積みが見られる。おそらくこの部分までには、天井石がおよんでおらず、前庭状を呈していたと考えられる。天井は平天井で、大型の石材を2枚架構している。床面は玄室と同様、土砂が堆積している。羨道内には、閉塞石と思われる安山岩製の板状石材が見られる。この石材には丁寧な面取り加工が施されている。羨道入口の前面左右には、板石を貼り付けており、その幅は羨道幅よりやや広がっている。また、腰石の使用については、土砂が堆積しているため、不明である。

羨道

以上、千金甲2号墳の概要を述べてきたが、ここで千金甲古墳群の変遷について考える（第6図）。出土遺物については、1号墳から出土した勾玉のみが知られているが、現在はその所在が不明となっている。よって、古墳の立地や石室構造などから、その変遷を追うことにする。

古墳群の変遷

まず、石室壁体の石積みからみていくと、1号墳は割石のみで壁体を構築しているのに対し、2・3号墳は、割石でもやや大きめのものや塊石を使用している。このことから、1号墳は2・3号墳に先行すると考えられる。また、3号墳は羨道部に比較的大型の腰石を配し、棚石を架構しているなど、2号墳より後出する要素を有しているといえる。さらに5号墳は玄室・羨道部ともに腰石技法を用いるなど、石材の大型化が見られる。千金甲古墳群では最も新しい時期に比定できる。

以上に述べた千金甲古墳群の築造順序は、古墳の立地からも窺える。1号墳は権現山中腹の

標高105m 前後の最高所に位置し、南に向かって2号墳、3号墳とその標高は低くなり、5号墳は標高約30mの高城山裾部に立地している。古墳が標高の高い場所から低い場所にかけて順に築造されたと考えれば、千金甲古墳群の築造順序は妥当なものといえよう。

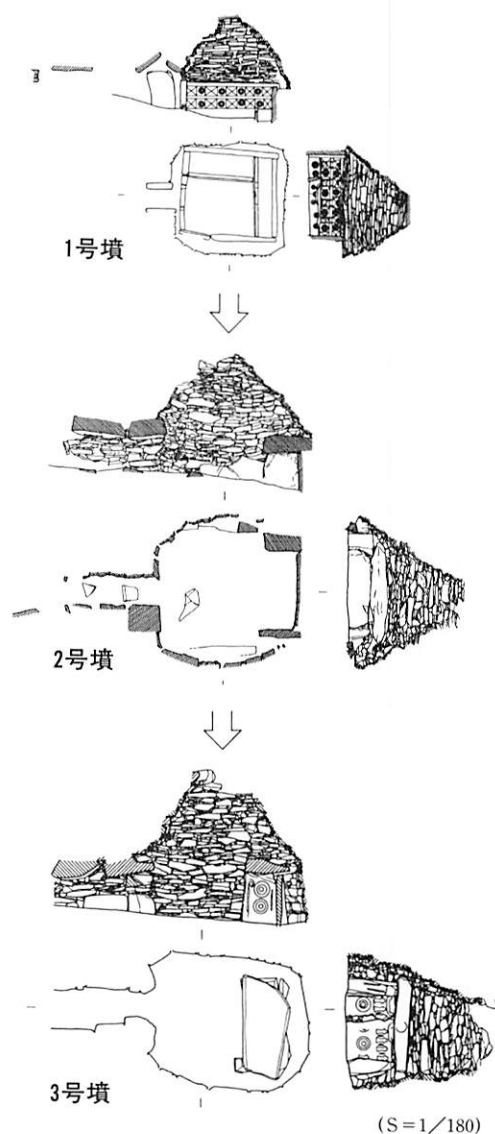
次に、この古墳群の実年代について考えていく。

1号墳は、しっかりとした羨道を有し、玄室と羨道の床面段差が小さいという構造的な特徴から5世紀後半から末葉に比定できる。

年代

2号墳は、明確な実年代を比定できる材料に欠けている。そのため3号墳からその年代を考えていく。3号墳では、羨道部の壁体にのみ腰石技法を用いている。これと同様の特徴を有する古墳には熊本市釜尾古墳や植木町横山古墳を挙げることができる。これらの古墳からは、6世紀中頃に比定できる須恵器が出土している。このことから3号墳が6世紀中頃のものと考えて差し支えないであろう。2号墳は、3号墳に比して、構造上大きな隔りがあるものではなく、3号墳と同時期か、若干さかのぼる段階の6世紀前半から中頃に位置付けることができよう。さらに5号墳は玄室にも腰石の配していることから、3号墳に後出し、後述する天福寺裏山古墳群と同時期の6世紀後半から末葉に位置付けられる。

千金甲古墳群の変遷は、1号墳→2号墳→3号墳→5号墳の順となる。(若杉)



第6図 千金甲古墳群 石室変遷図

(1・3号墳石室は註(4)文献より引用、再トレース)

- 註 (1) 松本健郎「千金甲古墳群」新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史』史料編 第一巻 考古資料、1995年。
 (2) 濱田耕作・梅原末治『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究报告 第一冊、1917年。
 (3) 乙益重隆他編『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会、1967年。
 (4) 三島格「28. 千金甲1号(甲号)古墳」伊藤奎二「29. 千金甲3号(乙号)古墳」高木正文編『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会、1984年。

4. 二軒小屋古墳 (熊本市池上町池上)

二軒小屋古墳 (第7・8図 図版3・4) は、井芹川右岸の金峰山を主峰として放射状にのびた山並みの南麓斜面の標高60m に位置している。この古墳から西方約50m 離れ、高さにして10m ほど登ったところに、もう一基古墳が存在していた。その古墳の内部主体も横穴式石室であり、それは二軒小屋古墳と類似し、これより小型であったというのが現存しない⁽¹⁾。

二軒小屋古墳は、古くから開口しており、第二次大戦中には防空壕として、戦後は倉庫として利用されていたという。二軒小屋古墳の保存状態は極めて良好で、何らかの形で破壊を受けた古墳の多い白川下流域においては貴重なものである。それにもかかわらず、この古墳についての調査・報告は、1969年の上野辰男氏による略測図⁽¹⁾、1996年の『新熊本市史』編纂に伴う墳丘測量図が作成されているのみである⁽²⁾。よって今回、市史編纂事業の一環として、新熊本市史編纂委員会の御協力のもとに、熊本大学考古学研究室が二軒小屋古墳の実測調査をおこなうこととなった。この実測調査にあたって、熊本県文化課 松本健郎氏、新熊本市史編纂事務局一木和世氏、地主 松尾正義氏、器材をお借りした福岡勇氏、また熊本古墳研究会の皆様には、多大なる御配慮、御尽力をいただいた。記して感謝したい。

二軒小屋古墳は金峰山南麓に所在する。この金峰山南麓に存在する古墳は、径10~20m 規模の円墳がほとんどで、内部主体としては箱式石棺と横穴式石室が多く、その他舟形石棺 (高城山3号墳)、石棺系石室 (小松山2号墳・堂の園1号墳) など存在する。以下では、横穴式石

立地

調査の契機

遺跡環境



第7図 二軒小屋古墳 墳丘測量図(註(2)文献より合成、再トレース)

室に注目し、この地域を概観していく。白川下流域で最初に出現する横穴式石室は、玄室四周壁に沿って板石をめぐらした、いわゆる石障系横穴式石室（以下では石障系石室とよぶ）で、千金甲1号墳・高城山5号墳・榑崎山5号墳・小松山1号墳がこれにあたる。そして、石障系石室に後続する、石屋形を有する横穴式石室は、千金甲2・3・5号墳、榑崎山1・7号墳などが知られている。この金峰山南麓の中でも、権現山・高城山・榑崎山一帯は、千金甲古墳群・榑崎山古墳群にみられるように、特に古墳の集中が著しい。

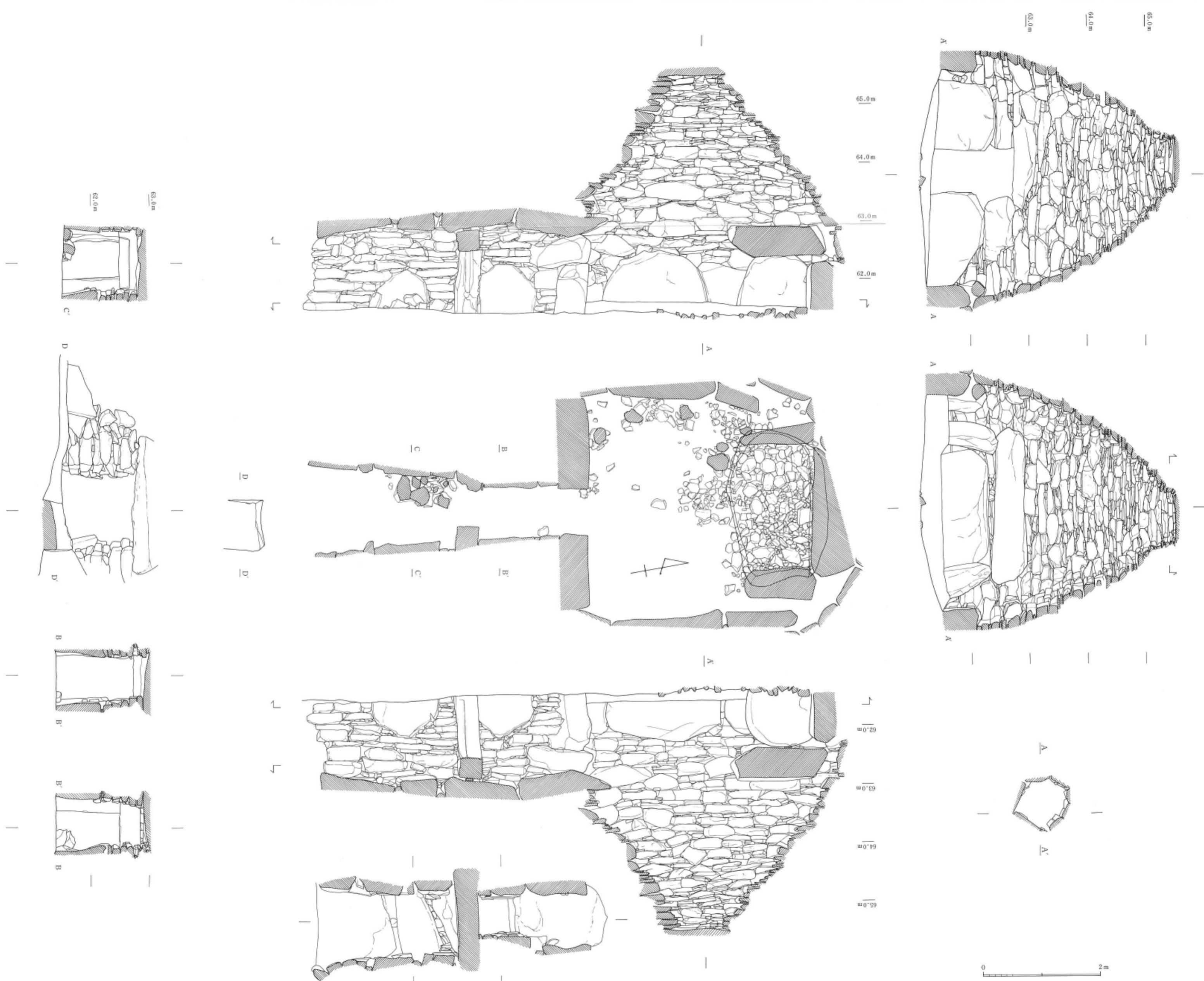
一方、二軒小屋古墳は、この集中域から多少離れている。先に挙げた小松山1号墳は、二軒小屋古墳周辺域と権現山・榑崎山・高城山一帯の中間に所在する。二軒小屋古墳周辺には、井芹川と坪井川の合流点近くで坪井川左岸の独立丘陵上にある城山古墳群、井芹川左岸の万日山に所在した万日山古墳群がある。城山古墳群は、3基の円墳と箱式石棺の存在が知られている。3基の円墳のうち、三の塚古墳の内部主体は南西に開口する横穴式石室であることがわかっており、玄室の奥壁に沿って石屋形を設置している。万日山一帯には横穴式石室が多数存在したというが、構造がわかっているものは万日山古墳のみである。万日山古墳は、奥壁に沿って平入横口式家形石棺、左右両側壁には石屋形を設置し、切石を多用した整美な横穴式石室である。以上のように、金峰山南麓には横穴式石室が多く分布し、それらは石障や石屋形など共通する要素を有している。二軒小屋古墳も例外ではない。

二軒小屋古墳は現状直径約15m・高さ約4mの円墳で、S-11°-Wに開口し、奥壁に沿って石屋形を設置した横穴式石室を内部主体とする。石室全長は8.5mを測る。使用されている石材はほとんどが安山岩であるが、羨道中央部に設けられた羨門のみ阿蘇熔結凝灰岩が用いられている。

玄室 玄室は、奥行3.8m・幅3.5mで、略方形の平面プランを呈し、天井高は4.2mを測る。両側壁下部に沿って大型の石材が配され、部分的に壁体に組み込まれている。玄室入口の袖部は安山岩の巨石を立て、その上部に一段塊石を積んで形成し、楣石を架け渡している。玄室入口幅は羨道幅とほぼ等しく、袖部は内側に突出していない。玄室壁面の石積みには安山岩の塊石や、割石を用いている。玄室下部から天井にいくにしたがって、大型の石材から小型の石材を用い、穹窿状天井を効率よく築く工夫がみられる。天井石は一枚で構成されており、天井部は玄室から見上げると、直径約80cm程度の円に近い形に見える。完成度の高い穹窿状天井である。

石屋形 石屋形は、安山岩の巨石を調整せずにそのまま用いて構築したもので、側石・奥石ともに独立して存在し、石室壁体に組み込まれていない。内法は幅約2.1m・奥行約1.2m・現状の高さ約1mと、広い内部空間を有する。この石屋形の床面を中心に、礫が多くみられ、礫床の可能性も考えられる。

羨道 羨道は、長さ4.7m・幅0.8~1.5m・高さ1.4~1.5mを測り、羨道入口に向かって徐々に幅広となる。壁体は下部に腰石を配し、その隙間や上部を塊石や割石を積んで構築しており、天井には4枚の大型石を横架している。羨道のほぼ中央、羨道入口から2.6mほど入ったところに凝灰岩製の羨門を設けている。羨門には、丁寧に面取り調整された角柱状の石材を用いている。それらを組み合わせた羨門は精巧なつくりで、羨道入口側には、閉塞受けの削り込みが施されている。なお、羨門の左袖石には、明瞭な段差が作りだされているが、これは後世に改変されたものである。閉塞石は羨道前面に放置されており、凝灰岩を長方形の板状に加工したものである。また、羨門前面左側にまとめてある塊石も、羨門での閉塞に伴うものの可能性がある。



第8图 二軒小屋古墳 石室実測图 (1/50)

羨道右側壁の羨道入口より1mほど入ったところに、壁体に組み込まれながら突出している石材が床面に認められる。これと対応する左側壁をみると、ほぼ直線上に腰石の下部を10cmほど削り込んだ部分を認めることができる。框石に相当するようなものがここに存在した可能性も考えられよう。

石室は、玄室入口の袖部上面で横目地が揃っており、ここまで羨道の側壁から玄室の下部をなす石を積み、羨道を天井石で覆った後、玄室のこれより上部の石積みをおこなったと考えられる。側壁はこの目地が揃うところまで比較的垂直気味に石を積み、この面からゆっくりと湾曲するラインを描いて持ち送られている。一方、奥壁と前壁は石の積みはじめから持ち送っており、持ち送りの角度は側壁に比べ急で、その描くラインは直線的である。

構築方法

出土遺物は知られておらず、実測調査の際に須恵器の小片を採集したのみである。

以上、石室構造の所見から、この古墳の特徴を挙げてみる。

1. 玄室側壁下部に沿って大型の石材を配し、それは部分的に壁体に組み込まれている。
2. 袖部は内側に突出せず、閉塞は羨道中央の羨門でおこなう。
3. 石室形は自然石を用い、天井石を屋根形に加工しない。

1の状況は、城山三の塚古墳にも認めることができる。この石材のあり方は、千金甲2号墳・千金甲3号墳・榑崎山7号墳・稲荷山古墳に認められるような、側壁・前壁下部などに沿って配された石材との関連が想定できる(第9図2・3)。稲荷山古墳においては、玄室内部の保存状態がよく、この石材は左右屍床の一部をなし、コの字形屍床を形成している。このコの字形屍床は、石障系石室築造からの屍床配置で、稲荷山古墳に明らかに認められるように、石障系石室に後出する、石室形を有する横穴式石室にも、コの字形屍床がかたちとして残っていることがわかる。石障系石室を築造する際に、コの字に区画する一部となっていた石材が(第9図1)、榑崎山7号墳・千金甲2号墳などに認められるように、側壁下部に沿って配された石材のように残り(第9図2)、さらには二軒小屋古墳・城山三の塚古墳のように、一部壁体に組み込まれたと想定できる(第9図3)。城山三の塚古墳の石室は、両側壁に沿って大型の石材を配しており、右側壁は、石材が一部壁体に組み込まれているだけでなく、前壁に沿っても側壁に沿って立てられた石材と同じ高さで板状石を配し、また石室形前面右側にもほぼ同じ高さで板状石を配している。これは、あたかもコの字形屍床の右側屍床のようであり、コの字形屍床の系統であることを裏付ける一例である。この地域での横穴式石室の出現、つまり石障系石室の築造がはじまって以来、コの字形屍床・穹窿状天井、それに伴う方形または隅丸方形の平面プランといった基本的な要素は、この地域における横穴式石室の根本的な要素として変化していないことがわかる。すなわち、この二軒小屋古墳などにみられる側壁下部に沿って配されている石材は、コの字形屍床の「かたち」が根強く残ったものと考えることができ、それは、この地域の横穴式石室の最終段階(万日山古墳)まで引き継がれている(第9図4)。

特徴1

2についてみてみると、二軒小屋古墳の玄室入口は、本来九州型の特徴とされるような、袖部の突出がみられず、したがって閉塞は玄室入口ではなく、羨道中央の羨門でおこなわれていると考えられる。袖部の突出がないこと、羨道の天井の高さが変わらないこと、羨道幅が狭いことから、玄室入口と羨門の間を「室」とは考え難い。ゆえに、当古墳石室は単室構造である。

特徴2

3は、この地域の石室形に共通する特徴である。古城史雄氏は石室形について論じる中で、

特徴3

菊池川下・中流域、白川下流域の石屋形を有する横穴式石室について整理され、その中で、次のような白川下流域に共通する特徴を指摘されている⁽⁴⁾。

- ・石屋形は、奥石及び側石が石屋形独自に存在し、袖石・框石がないものが主流である。
- ・屋根石は板状のままである。

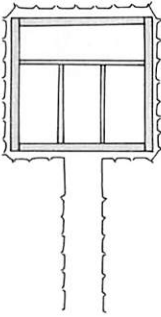
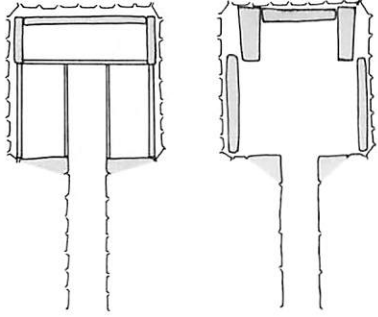
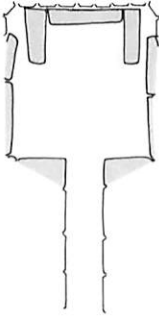
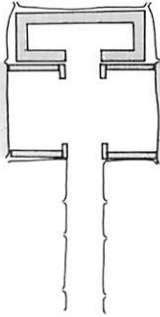
石屋形の成立については、石障系石室の奥屍床の発達と、平入横口式家形石棺の変化という2系統が考えられている⁽⁵⁾。これら2系統からの石屋形の成立を想定された古城氏は、前者は井寺古墳・田川内1号墳、後者は弁財天古墳・塚坊主古墳をそれぞれの初期の石屋形としている⁽⁴⁾。白川下流域は、この2系統が展開した地域の間中域にあるが、この2系統どちらかの特徴を顕著に表すことはない。菊池川流域では、横穴式石室に平入横口式家形石棺が入れられるようになり、緑川以南では石障系横穴式石室の奥屍床が変化するというみかけ上の違いはあるが、玄室内の埋葬施設の変化という点で、この2地域の共通した、遺骸安置施設に対する何らかの意識の変化があったことを想定することができる。これら2地域に挟まれた白川下流域でも、共通した意識変化の結果、石屋形が構築されるようになったと考えることもできよう。

これら3点の特徴は、白川下流域の石屋形を有する横穴式石室（千金甲2・3号墳、城山三の塚古墳、万日山古墳）に共通する特徴でもあり、従来「肥後型」石室とよばれる横穴式石室の範疇にあって、他地域とは異なる白川下流域独自の展開を示した一例であろう。

ところで、石障系石室隆盛後の横穴式石室の変容について、「天草型横穴式石室」⁽⁶⁾を提唱した池田栄史氏の天草地域における研究がある。池田氏は、この種の石室は石障系石室（「半地下系肥後型石室」⁽⁷⁾）との構造の類似、分布の重複、時期的な差異から「半地下系肥後型横穴式石室」から「天草型」石室への変遷が考えられ、石障系石室に腰石技法が導入されたことから生じた結果とみなしている⁽⁶⁾。この「天草型」石室においても、白川下流域で認められたような地域的特徴を看取でき、「肥後型」と一括されている横穴式石室の中での、地域性・多様性を指摘することができる。

年代 最後に、二軒小屋古墳の年代について考えてみる。構造的にみると、側壁下部に沿って配した石材が部分的に石室壁体に組み込まれているということから、千金甲3号墳より後出するもの（特徴1）である。千金甲古墳群の変遷については、前章の千金甲2号墳に所見に詳しいが、それによると、千金甲3号墳は6世紀中頃に位置づけられている。このことから二軒小屋古墳の築造年代を推定すると、6世紀後半と比定できよう。

熊本の古墳研究は、主に装飾古墳・石障系石室などの特性に注目して、数多くの研究が進められてきた。その一方で、地域的な基礎となる研究は、あまりみられない。この報告が、地域的研究のきっかけとなることを願いたい。 (濱田)

			
<p>1. 石障内部をコの字に区画する 千金甲1号墳 檜崎山5号墳 富ノ尾1号墳 小松山1号墳</p>	<p>2. 石屋形が出現し、側壁下部に沿って石材を配する 千金甲2号墳・千金甲3号墳 檜崎山7号墳・稲荷山古墳</p>	<p>3. 側壁下部に沿って配された石材が一部壁体に組み込まれる 二軒小屋古墳 城山三の塚古墳</p>	<p>4. 腰石技法の出現 万日山古墳</p>

第9図 白川下流域における屍床変遷概念図

- 註 (1) 乙益重隆他編『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会、1967年。
- (2) 松本健郎「二軒小屋古墳」『新熊本市史』資料編 第1巻 考古資料、1996年。
- (3) 池田栄史「石屋形の成立とその系譜」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』、1982年。
- (4) 古城史雄「九州における横穴式石室の様相」『古代の出雲を考える』8 横穴式石室にみる山陰と九州—石棺式石室をめぐる— 出雲考古学研究会、1995年。
- (5) 藏富士寛「石屋形考」『先史学・考古学論究II』熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集 龍田考古会、1997年。
- (6) 池田栄史「天草における横穴式石室の一例」『肥後考古』第2号 肥後考古学会、1982年。この中で池田氏は、玄室の四隅において、腰石上に石材を横架し、腰石として機能しているものの、両側壁および奥壁中央部では、壁材を腰石の上縁部裏側から積み上げ、実際腰石として機能していない肥後型石室に一般的に用いられている腰石技法とは、異なる天草地方独特の技法を用いた横穴式石室を天草型石室とし、その代表例として、楠浦新田古墳・下浦須森古墳・大松戸古墳を挙げている。
- (7) 乙益重隆「石障系石室古墳の成立」『国学院大学大学院紀要』第11輯 国学院大学大学院、1979年。
乙益氏は、玄室の平面形が隅丸方形に近く、側壁は割石や塊石で小口積にし、上部は穹窿状に持ち送り、その上に天井石を架する石室を「肥後型」と命名し、同じ系統に属しながら竪穴式石室であるものを「竪穴系肥後型」として、またこの亜流とみられる半地下式の横穴式石室を「半地下系肥後型」と称している。半地下系肥後型石室は、地表下を1m前後掘り下げ、分厚い切石の石障をほぼ方形に立てめぐらして、石室下部を構成し、その後、石障の上縁外側から割石を平積みに持ち送って築き、天井石で覆うもので、代表例として小田良古墳・長砂連古墳を挙げている。
- (8) 宮代栄一「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』第9号 肥後考古学会、1996年。

立地

5. 天福寺裏山古墳群(熊本市花園町7丁目)

天福寺裏山古墳群は白川の北方を流れる井芹川の右岸に位置し、小萩山東麓の中腹斜面、標高110~120mの場所に存在する。古墳群の南東側150m程のところには曹洞宗天福寺があり、この古墳群の名の由来となっている。付近一帯はミカン畑となりすでに開墾がおこなわれているが、古墳周辺は市有地となり、古墳自体も市の指定遺跡としてその保護が図られている。



1 大塚原古墳 4 釜尾古墳 7 堂手古墳 10 富ノ尾古墳群
 2 羽山塚古墳 5 天福寺裏山古墳群 8 畑の原古墳群 11 竹ノ上石棺
 3 扇田横穴 6 堂出古墳 9 羽田古墳 12 稲荷山古墳

第10図 金峰山東麓における古墳分布図

天福寺裏山古墳群は3基の古墳より構成され、いずれもほぼ南側に向かって開口する横穴式石室を内部主体とする(第11図)。墳丘はそれぞれ現在径10m程の円形を呈しており、いずれの古墳も径十数mの円墳であるとみて大過ない。各古墳は最高所に位置し石室規模も最大のものを3号墳、その下方に併存する2基を東側から1号墳、2号墳と呼称されている。現在、内部主体である横穴式石室は比較的良好に残存しているが、やはり何らかの破壊の跡は認められる。いずれの古墳も封土の流失のため、天井石の一部が露出している。特に2号墳では石室石材が土圧のため、石室内に落ち込みかかっており、石室自体が危険な状況にある。早急な対策が望まれる。

遺跡環境

天福寺裏山古墳群の存在する小萩山東麓一帯には、多くの古墳が存在する(第10図)。横穴式石室を内部主体とするものをみていくと、当古墳群の東方数kmの場所には石障系石室である富ノ尾1号墳、石室内に石屋形を有する釜尾古墳、稲荷山古墳が存在する。釜尾古墳、稲荷山古墳は装飾古墳としても著名なものである。また天福寺裏山古墳群の近在にも、いくつか横穴式石室が存在する。南東方向600mの地点には畑の原古墳群があり、かつて単室構造の横穴式石室が存在していた。また東方500mに存在する堂出古墳からも横穴式石室の存在を思わせる石材が認められる。畑の原古墳群に近接する羽田古墳は、古墳時代後期に相当する須恵器が表採されており、内部主体は横穴式石室であろう。

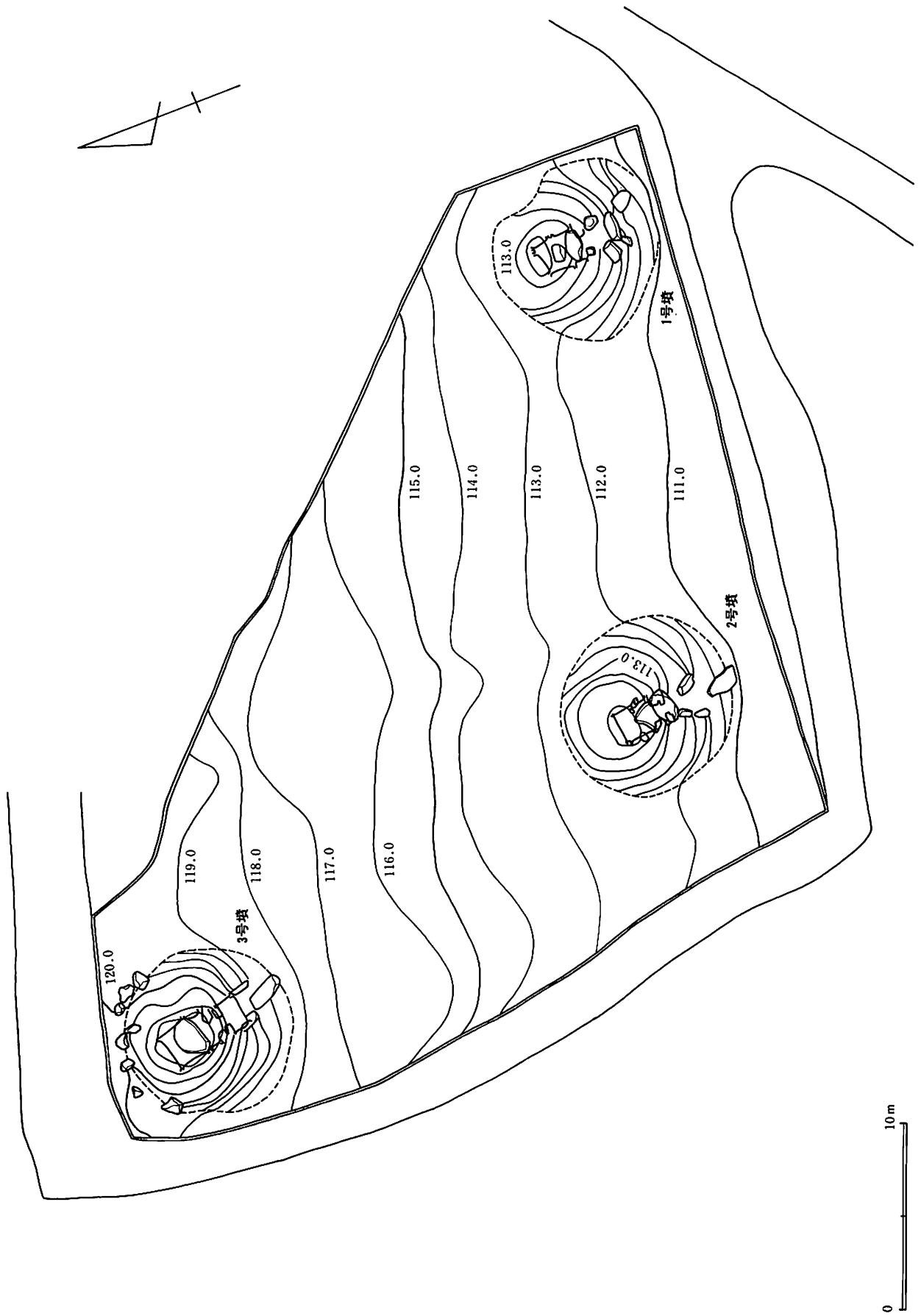
過去の調査

天福寺裏山古墳群は1935年、森下功氏によって初めて調査がおこなわれ、1・3号墳略測図が作成されている。後1967年には平岡勝昭・富田紘一氏により、2号墳の略測がおこなわれている⁽¹⁾。

また近年、『新熊本市史』の編纂がおこなわれ、その考古資料編の中で松本健郎氏による解説がなされている⁽²⁾。天福寺裏山古墳群は白川下流域では主体部が比較的良好に残されている古墳群であり、また玄門部には剝抜玄門を採用するなど、構造的にも特色あるものである。このように天福寺裏山古墳群は白川下流域の横穴式石室、ひいてはこの地域における古墳時代後期の社会を考える上で極めて貴重なものであり、市史編纂事業の一環として、新熊本市史編纂委員会の御協力の元に、当研究室が各古墳の測量、そして主体部の実測調査をおこなった。この調査にあたっては、熊本県文化課松本健郎氏、新熊本市史編纂事務局一木和世氏、天福寺、そして熊本古墳研究会の皆様にも多大なる御配慮そして御尽力をいただいた。記して感謝したい。

註(1) 乙益重隆他編「熊本市西山地区文化財調査報告書」熊本市教育委員会、1967年。

(2) 松本健郎「天福寺裏山古墳群」『新熊本市史』資料編第1巻 考古資料、1996年。



第11图 天福寺襄山古墩群 周边测量图

1号墳（第12図 図版8）

S-5°-E方向に開口する単室両袖構造の横穴式石室で、当古墳群内では東端に位置する。現在、羨道部分は破壊され、わずかにその壁体を留めるのみであり、石室内には土砂が流入して玄門の半ば近くまでが埋没している。

玄室 玄室は2.2m×1.7mの長方形プランで、現状では天井高1.4mを測る。壁体下部には奥壁・左右側壁側に2石ずつの腰石を配し、特に奥壁と左側壁との交差部分にあたる腰石は大型の石材を使用している。腰石上は4～6段の石積みをおこない、壁体を構成する。石室石材には安山岩の自然石を多用し、面取り調整はあまりなされておらず、石室自体粗雑な感を与える。玄門袖部は石材を横位に2段積み上げることによって構成され、その上に楕状の石材を架け渡す。天井石は2石より成り、楕石上から段状に積み上げる。したがって玄室奥側の天井は玄門側より一段高くなる形となる。これは前壁石材の持ち送りを大型石材の使用によって簡略化した結果であろう。

羨道 羨道部分は大きく破壊を受けており、右側壁の石材がわずかに原位置を留めるに過ぎない。この部分より推定すると、羨道幅は1m程と考えられ、これは玄門幅とさほど変わらない。また周囲に散乱する石材をみると天井石が存在したのは確実であり、羨道の長さも2m程は存在していたのではないかと思われる。残存している石材をみる限り、羨道の壁体は玄室と同程度の石材による石積みによって構成されていたものと考えられる。

線刻 なお、当古墳奥壁には線刻による装飾が施されていることが指摘されている⁽¹⁾。第12図にみるように、確かに奥壁には線刻らしき刻線をみることができるが、その文様自体はまとまりのあるものではなく、この刻線を装飾としてみなすことができるかは不明である。

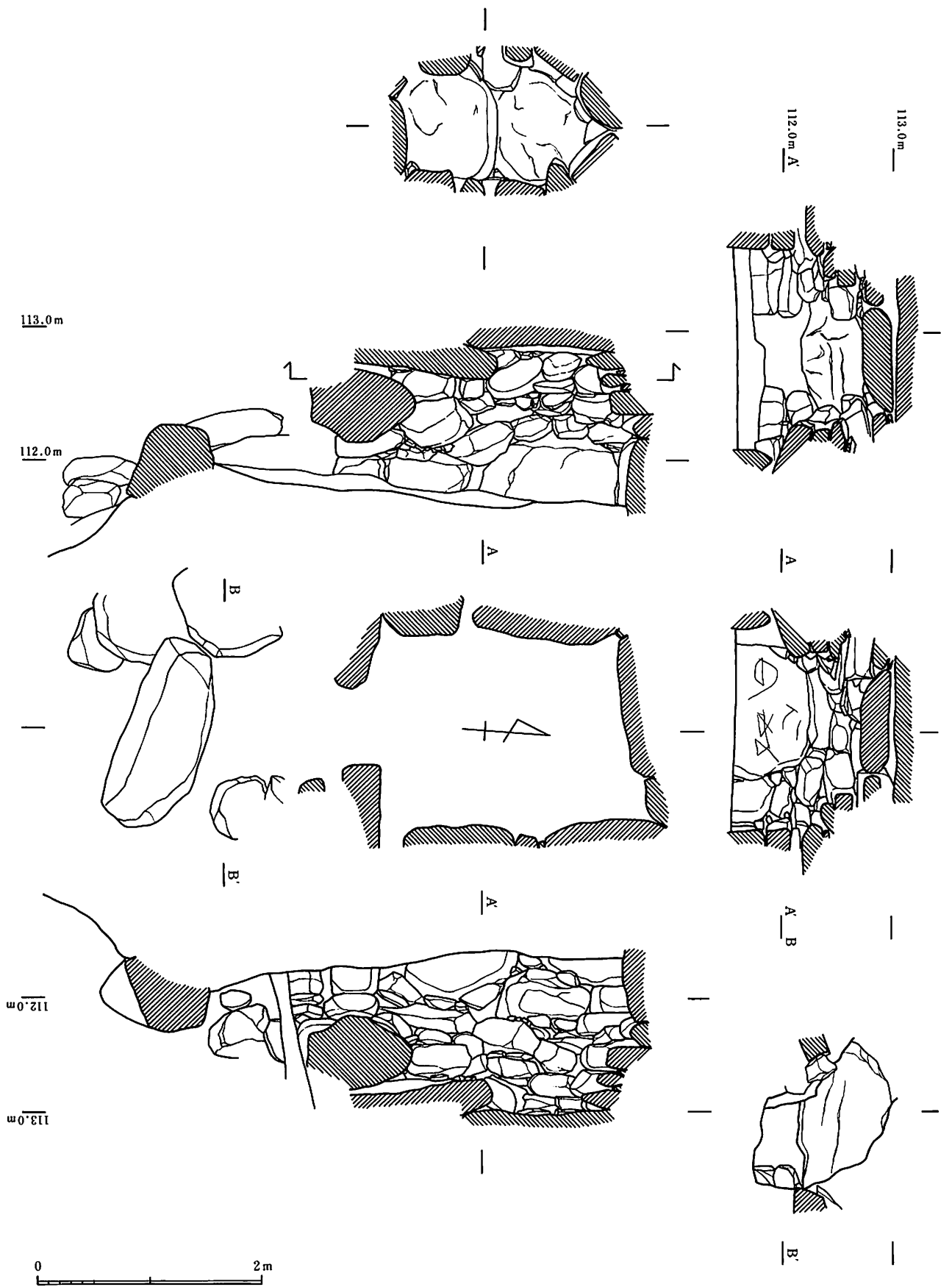
註（1）乙益重隆他編『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会、1967年。

2号墳（第13図 図版7）

S-6°-E方向に開口する単室両袖構造の横穴式石室で、1号墳の西側、3号墳の南側に位置する。石室内には玄門からは出入りできないほど土砂が流れ込み、玄門部（刳抜玄門）石材は割れ、側壁の石材の一部が石室内に落ちかかっているなど、石室自体が危険な状況にある。羨道部は玄門近くの石材を残すのみである。

玄室 玄室は2.0m×1.7mの長方形プランで、現状では天井高1.4mを測る。玄室壁体下部には奥壁・左側壁に1石、右側壁には2石よりなる腰石を配し、その上には4～6段の石積みを施す。石材の持ち送りはわずかである。腰石の高さは玄室にかなりの土砂が流入しているため不明だが、玄門部の高さをみる限り、1号墳における腰石のそれと同程度か、より低いものと考えられる。玄室壁体には安山岩の塊石を用い、その積み方は、随所に縦目路が通るものであり、特に左側壁において顕著である。石材は大半が面取り調整をおこなっており、1号墳に比して整美な印象を与える。天井石は2石よりなり、1号墳や後述する3号墳と同様、天井部自体は段状となっているのだが、天井は玄門側が高く奥壁側が低い点が異なる。ここに、2号墳では、1・3号墳（玄門上の石材→前壁側石材→奥壁側石材）と異なる天井石の配置順序（玄門上の石材→奥壁側石材→前壁側石材）をみることができる。

刳抜玄門 玄門袖部は2つの立石により構成されているが、当古墳玄門部の大きな特徴は二重玄門となっていることで、立石による袖部の外側には阿蘇溶結凝灰岩による板石の中央部をくりぬいて



第12图 天福寺褒山古墳1号墳 石室実測図(1/50)

作った刳抜玄門を作りつけている。玄門の幅は立石部分で0.8m、刳抜玄門で0.5mを測る。刳抜玄門は破損がひどく、その表面も大部分がすでに剝離しており、原形を留めている部分は少ない。しかし、いくらか原形を留めている部分を観察すれば、この石材の表面が平滑に仕上げられていること、前面には閉塞石を受けるための刳り込みが施されていること、が看取できる。また、この刳抜玄門は破損がひどく、とても上部の石材を支える状態ではないにもかかわらず、石室自体には、構造上なら影響がないことには注意しなければならない。玄門上の石材は刳抜玄門の奥におかれた立石と石材羨道の壁体によって支えられており、刳抜玄門は構造上の必要性が認められないものとなっている。

羨道 羨道は玄門付近で幅1.5mと玄門幅より大きく広がっている。わずかに残存している側壁材をみると、右側壁では玄室壁体を構成している石材と大差ないが、左側壁では大型のものを使用している。

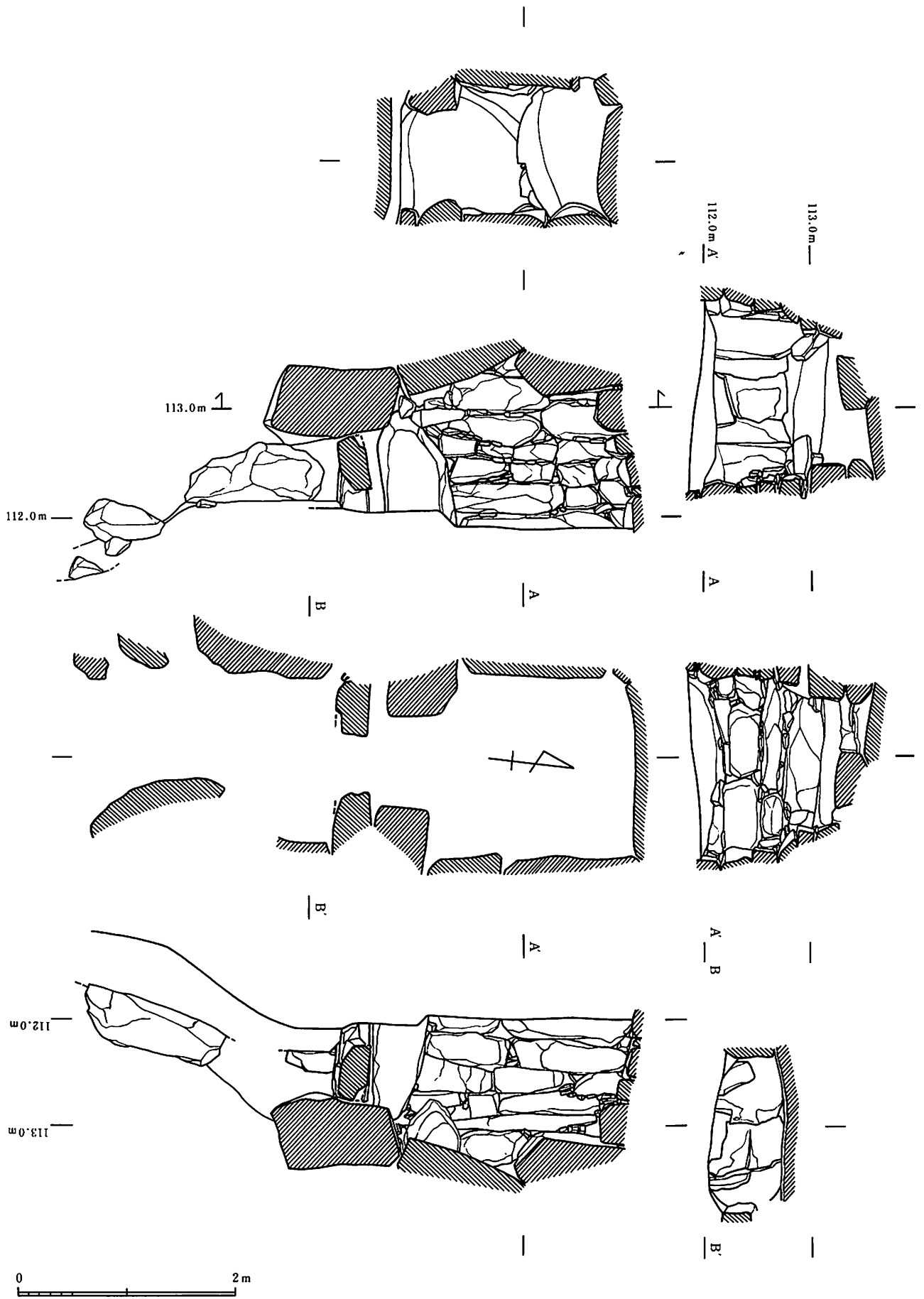
3号墳（第14図 図版5・6）

S-18°-E方向に開口する単室両袖構造の横穴式石室で、当古墳群のうちで最高所に位置する。石室石材には主として安山岩、玄門部（刳抜玄門）にのみ阿蘇溶結凝灰岩が用いられる。石室は良好に残存しており、土砂の流入も少なく、容易に石室内に立ち入ることができる。

玄室 玄室は2.6m×2.0mの長方形プランで、天井高は現状で1.8mを測る。この数値は玄門框部分のレベルを考えれば、本来の高さとさほど変わらないものと考えられる。3号墳の石室は当古墳群3基の横穴式石室中では最大の規模を誇る。玄室壁体下部には奥壁に1石、左右側壁側には2石よりなる腰石を配し、その上には7～8段の石積みを施す。腰石の高さは石室壁体の高さの1/3も満たない低いものである。壁体は腰石上から隅角を消しながら、わずかにもち送りつつ石積みがおこなわれ、かなり大きめな安山岩塊石を使用している。その石材は面取り調整がなされており、随所に縦目路が通る。天井石は2石よりなり、1号墳と同様の配置を取る。

刳抜玄門 玄門袖部は2つの立石により構成される。当古墳玄門部も2号墳と同じく二重玄門となっており、立石による袖部の外側には刳抜玄門が存在する。刳抜玄門は石室壁体に組み込まれておらず、まさしく立石袖部の外側にはめ込んだような体裁を取る。刳抜玄門は整美に加工された180cm×170cm、厚さ40cmの阿蘇溶結凝灰岩による板石の中央部をくりぬいて作ったもので、かなりの大型品であり、その入口は高さ0.8m、幅0.5mを測る。刳抜玄門奥側の立石による袖部には楣石が架け渡されている。羨道及び玄室の天井石は楣石及び羨道側壁によって支えられており、刳抜玄門の存在自体は構造上の必要性を有しているものではない。刳抜玄門の外側には、長方形を呈する深さ1cm程の浅い刳り込みがある。これは玄門前に横たわる140cm×90cm、厚さ20cmの凝灰岩切石による閉塞石を受けるためのものと考えられ、大きさの上でもこの両者は矛盾しない。

羨道 羨道部は現在2m程が残存している。左側壁は玄室壁体と同様の石材による石積みよりなり、右側壁では腰石状の大型石材を基底部に配する。羨道幅は1.7mで、玄門幅に比して大きく広がり、玄室幅に匹敵するほどの広さを有する。刳抜玄門の框部分より推定して天井はおよそ1.3m程の高さであったと考えられる。



第13图 天福寺裏山古墳群 2号墳 石室実測図 (1/50)

まとめ

構造上の特徴

天福寺裏山古墳群における3基の古墳は、石室の形態、使用石材の状況、立地などから考えて3号墳が1号墳・2号墳に先行して築造されたものと考えられる。1号墳・2号墳とは構造的に大きな隔たりのあるものではないが、1号墳に施された腰石は2号墳に比して大型化しており、1号墳は2号墳に後出するものとして捉えることができよう。当古墳群3基の横穴式石室では、3号墳と2号墳の共通性が目立つ。3号墳・2号墳と1号墳を比べると、下表に示したような違いが看取できる。

	3号墳・2号墳	1号墳
平面プラン	玄門部に比して幅広の羨道を付設	玄門部幅とほぼ等しい羨道を付設
刳抜玄門の有無	あり(二重玄門)	なし
袖部の加工方法	立石による	積石による
石材加工	面取り調整あり	面取り調整なし

刳抜玄門

当古墳群の横穴式石室に特徴的なものとして、刳抜玄門の存在を挙げることができる。これは熊本県内にのみ存在し、現在では21例の存在が確認されている。刳抜玄門は分布の中心を宇土半島基部を中心とする熊本県南部に求めることができ、県北部(白川以北)では当古墳群の2例を含めて5例を数えるに過ぎない。このように両地域では分布の上でははっきりとした隔たりをみせているのであるが、刳抜玄門の形態を比較すれば、県北部と県南部の違いはより明瞭となる。その違いとは閉塞石受けのための刳り込みの有無であり、県南部ではあれほど多くの刳抜玄門を有する古墳が存在しているにもかかわらず、刳り込みを有するものは1例も存在しない。この相違は妻入横口式家形石棺にみられる横口部にも認められるものであり、つまり「刳抜玄門」に関していえば、5世紀から6世紀を通じて、両地域ではその技法に変化がみられない。

凝灰岩を使用した石棺、石製表飾などの石製品をみれば白川流域を境にして県北部と県南部で下表のような明確な違いをみせることが知られている⁽¹⁾。

	県北部	県南部
舟形石棺 ⁽²⁾	北肥後型	南肥後型
家形石棺 ⁽³⁾	第II類	第IV類
石製表飾	人物中心	器材(楯・笠)中心
刳抜玄門	刳り込みあり	刳り込みなし

このように刳抜玄門は大きく県北部と県南部という凝灰岩加工集団のまとまりを明確に示す一材料となり得るのであり、ここから熊本県全体において白川下流域のおかれていた政治的・社会的状況を類推することも可能となろう。

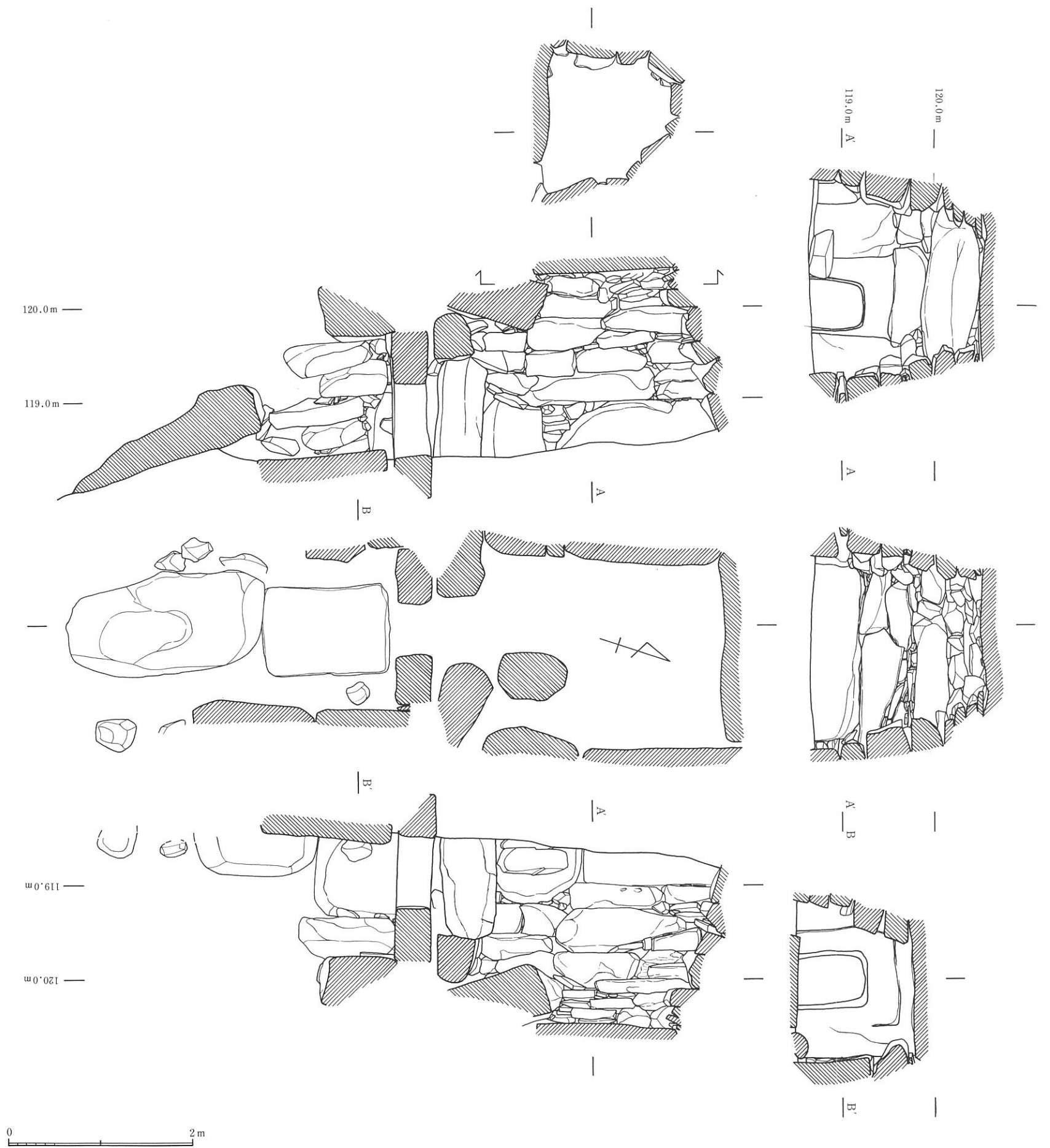
年代

天福寺裏山古墳群では出土遺物は知られておらず、それぞれの築造年代を比定する決め手に欠けるが、腰石技法を用い、安山岩の塊石によって石室壁体を構成するという構造上の特徴や、近在する同様の主体部をもつ古墳から6世紀後半頃に比定できる須恵器が出土していることから、当古墳群で最も古い3号墳の築造を6世紀後半、そしてそれに続く2号墳・1号墳の年代を6世紀末葉頃と考えておきたい。(藏富士)

註(1) 柳沢一男「石製表飾考」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集、1987年。

(2) 高木恭二「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻第5号、1994年。

(3) 佐田茂・高倉洋彰「九州の家形石棺」『筑後古城山古墳』大牟田市教育委員会、1972年。



第14图 天福寺裏山古墳群3号墳 石室実測図 (1/50)